

学校を飛び出して、  
地元で活躍するオトナを取材しよう！

# 僕らは どんな生き方 だってできる

ふれ愛の家  
副所長サービス管理責任者  
中村武文さん



障がい者の方の支援をしているふれ愛の家の中に、この仕事に就くまでの過程や今の仕事について伺いました。

**Q**..ふれ愛の家の利用者はどういふ方ですか。  
身体障がい、知的障がい、身体障がい等を持たれた方です。

**Q**..何歳からここに入れるのですか。

特別支援学校を卒業した18歳から65歳までの人が入れます。ですが、町や市が必要だと認めればその年齢を過ぎても大丈夫です。

**Q**..ここではどのようなことをしていますか。

オーガニックの和綿を栽培し、渋柿で染め物をしたり、企業からの内職をしたり、月に三回ランチカフェ「neeto」をやっています。

カフェは保護者の方に調理をしてもらって、利用者さんが食事の配膳とレジをやっています。レジはタブレットを使って数字だけではなく、お金の絵がかかれたものも使用するなど工夫しています。ステージパフォーマンスやバザーもしています。

また、人とたくさんコミュニケーションを取れるよう祭りに参加したり、保育園へ行ったり、小学校の子達に来てもらったりして、地域の人と交流できる機会を作っています。

**Q**..パフォーマンスやバザーを行う目的は何ですか。  
目的は二つあります。一つ目は、利用者さんの

**Q**..この仕事に就くまでの道のりを教えてください。

高校卒業後、福祉関係の専門学校へ行きました。そして就職したのですが、みんなが幸せになるための福祉だと思っていたのに、利用者さんに注意ばかりしていることが嫌になり、本当の幸せを探しにオーストラリアに飛び出しました。

オーストラリアは専門学生の時に福祉の研修で行ったことがあり、その時出逢ったディジュリドウという先住民アボリジニの楽器を習おうと思ったからです。とにかく一度、障がい福祉から離れようと思いました。旅中はストリートミュージシャンをやっていたので、先住民やホームレス、旅人やドラッグ中毒者等、多種多様な人を目の当たりにしました。そして僕自身も食べるものがなくて、ゴミ箱をあさることもありました。それでも生きていけたし、いろんな生活を経験したことで、誰もが幸せになるために生きているのだと悟りました。そして、「利用者さんが何かが出来るようになることを目指すだけでなく、その日々が幸せであるように支援すればいいんだ」と答えが出て、ふれ愛の家にいる方たちのことも支えていける、という自信にもなりました。

**Q**..苦しいことはどうやって乗り越えてきましたか。

僕は旅に出ることで苦しいことから逃げました。環境を自分で変えるのもいいと思います。でも、逃げることで解決できない問題もあります。誰もが、乗り越えなければならぬ課題を持っています。以前の職場で、僕には気が付かない細かいことに気が付ける年配の女性が苦手でした。でも、僕が就いているこの福祉の仕事は、年配の女性が多いです。帰国後は以前より多くの年配の女性と仕事をする事になりました。向かい合うべき

収入を増やすためです。二つ目は、利用者さん達が喜んでくれるし、一般の方と楽しく交流する機会をつくれるからです。



**Q**..利用者さんたちの魅力を教えてください。

この前ボランティアにきた女の子が「こんな優しくして、ユーモラスな人達だとは思わなかった。自分たちと変わらなくて、全然イメージと違った」と言っていました。本当にそうだと思います。ある意味自分達と違う文化の中で生きているけど、自分達と全く変わらない部分があるんです。でも、自分に正直な人が多いので、こちらまで正直になれる。一緒にいて心地が良くて、幸せな気分になれる。本当の豊かさについて、考えさせてくれる人たちです。

**Q**..保護者の方とはどのように関わっていますか。

保護者の方には、なるべく自分の本音を言うこ

課題は、逃げてみても必ずまた現れてくれます。だから、どうしてもダメだと思ったときは一旦そこから逃げてみてもいいと思います。次に現れた時には、乗り越えられるかもしれないから。今は年配の女性をとて頼りにしています。

とを大切にしています。例えば、みんなの魅力を伝える場として写真展や作品展を開いたり、写真の本にしたりしています。こういう活動は、利用者さんたちは喜んでくれるけど、保護者の中には当然複雑な思いを持っている方もみえます。だから、それぞれの立場から見た支援について本音で話し合うようにしています。



**Q**..この仕事に就いた理由は何ですか。  
高校生の時、反抗期で悪さばかりしていて停学になり、その期間にお年寄りの方のお世話をするボランティアへ行きました。そのときに「ありがたい」と言われて、穏やかな気持ちになり、自分の存在価値が認められる福祉という仕事があったらいいなと気が付きました。また、以前特別支援学級の子と交流があった時に、楽しい人たちだなと思ったからです。



## 【感想】

中村さんにインタビューをして、障がい者の方を支援することへの見方が変わりました。今までとはとても大変なものか思っていたけれど、実際に施設に行くと利用者さんの演奏を聴かせてもらったりときに中村さんも利用者さんに交じってすごく楽しそうに歌を歌っていました。その姿を見たときに中村さんは利用者さんを「障がいを持っている人」ではなく「一般のひと」として接していると感じました。また楽しみ方を自分で見つけて自分から周りの人も楽しませていけることを学びました。だから、これからふれ愛の家のような施設にボランティアに行った時は、「障がいを持っている人」と区別をつけず、「一般のひと」として関わりたいと思いました。